シュービナ、オーリガ・アリクシエヴナ

サハリン南部アホーツカヤ 3 多層集落跡のかまど付き住居群（2000・2001 年の発掘調査結果）

『サハリン博物館報』第 11 号、ユジノサハリンスク、2004 年

Шубина, Ольга Алексеевна. Жилища с печами на многослойном поселении Охотское-3 на Южном Сахалине (итоги археологических раскопок 2000-2001 гг.).

Вестник Сахалинского музея No.11, Южно-Сахалинск: Сахалинский областной краеведческий музей, 2004. 179-206.

第 1 部：冒頭から「粘土で築いたかまどの記載」まで

解題

1990 年代に至って、アホーツカヤ（旧富内）の集落と周囲の湖沼群の付近に古代の集落遺跡が集中していることが明らかになった。アホーツカヤ 3 遺跡もその一つで、富内川（赤軍水道）を挟んで対岸には南サハリン最大の古代集落とされるセディフ 1 遺跡がある（ワシレフスキー2006、ワシレフスキーほか 2007 など）。

この文献は 2000 年と 2001 年に発掘されたかまど備えた竪穴住居群について報告したものである。かまどは北海道からの影響によってサハリン南部に出現したものと考えられ、アホーツカヤ 3 遺跡の事例は発見後間もない時期から注目された（Шубина 2002）。板状の礫を組んだ煙道（瀬川 2008）や粘土で煙道を閉塞する風習（鈴木 2000）など道内の擦文文化住居で知られる特徴がサハリン南東部でも確認されたことは興味深い。擦文文化のかまど自体もまた本州から波及したものと考えられており、ここで紹介される事例は我々の地域の古代集落遺跡群が広域にわたる歴史・文化的な関連を反映した文化遺産であることを具体的に物語っている。

著者によると、この報告の後にサハリン州内でかまどを有する住居跡の調査例は増えていないとのことで、州内のこの種の遺構について詳しく公表した文献としてはいまだに唯一のものである。原著は書籍形式のほかサハリン州立郷土誌博物館公式サイトの「出版物」のページで閲覧できる。考古学的な術語は次のように訳した。

дёрно：草の根の層　заполнение：覆土　жилищный котлован：住居の掘り込み
жилой комплекс：居住の所産　кановая система：導熱管システム　котлован：竪穴
котлован жилища：住居跡　насыпа：盛土　объект：遺構　очажная линза：火床の堆積物
плечико：竪穴の肩　поселение：集落跡　предмет：遺物　стенька：壁面
супесь：砂質土　топка：燃焼室

当課からの翻訳と転載の依頼に対して承諾を与えられたサハリン州立郷土誌博物館の Ю.Ю.アリン館長と著者シュービナ博士に感謝申し上げる。特に著者からは原著公表当時の挿図画像を提供いただきカラー写真を公表できたこと、翻訳に伴う疑問にも詳しくお答えいただいたことを記して深謝申し上げたい。また、当庁のウェブサイトの仕様上の制限のため訳文を前後 2 部に分割せざるをえなかったことをお詫びしたい。　（西脇対名夫）

鈴木　信　2000　「H-13 の竈廃用祭祀について―千歳市・恵庭市内の遺跡と比較して」財団法人北海道埋蔵文化財センター編『千歳市ユカンボシ 15 遺跡（3）』　同センター　399-408

瀬川拓郎　2008　「サハリン=アイヌの成立」　菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ―奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界―』　高志書院　225-252

ワシレフスキーA. A.（福田正宏・熊木俊朗訳）2006「サハリン州コルサコフ地区オホーツコエ村「セディフ遺跡群」における新石器時代・初期鉄器時代・中世の考古学的文化複合」『北海道考古学』第 42 輯　1-16

図１　アホーツカヤ村、トゥナイチャ湖及びイズミェンチヴァヤ湖地域における考古遺跡の位置図

A. ワシレフスキー・V. デリューギン・熊木俊朗・福田正宏・大貫静夫・井出靖夫　2007　「サハリン州コルサコフ地区「セディフ１遺跡」の研究」　佐藤宏之編『第８回北アジア調査研究報告会発表要旨』　同報告会実行委員会　11-14

Шубина, О.А. 2002, Археологические раскопки древнего поселения Охотское-3 на Южном Сахалине в 2000-2001 гг.（要旨の対訳「2000 年~2001 年に南サハリンにおけるオホーツコエ・3 古遺跡の発掘調査」を含む）Amano, Tetsuya and Vasilevski, Alexander. ed., Okhotsk Culture Formation, Metamorphosis and Ending: Japan and Russia Cooperative Symposium. The Hokkaido University Museum, Sapporo. pp. 50-61.

サハリンでのほぼ 100 年間にわたる考古学研究の結果、民族的・文化的な単位としてのオホーツク文化研究のための広範な資料整備がなされ、「オホーツク問題」[1] に関する多くの疑問に答えを求めることが可能になっているが、同時にこの問題に関わる各分野の研究の進展にはばらつきがあって、野外調査の作業を含む情報収集の徹底がなお必要である。今日まで研究の進んでいない事項の一つはサハリンにおけるオホーツク文化の終末期とアイヌの出現であり、それはまず何よりもこの時期に属する良好な層位を伴う遺構群の発掘調査が不足していることによる。サハリン州立郷土誌博物館の考古学調査隊は、2000･2001 年度にアホーツカヤ 3 集落跡で行った緊急発掘の結果この段階に関する研究の空白を埋めることになった。この論文の目的は、この調査で得られた資料を学術利用に供すると共に、石と粘土で築いたかまど様の施設 [2] というサハリン考古学の新たな研究対象の特性を詳しく述べることにある。

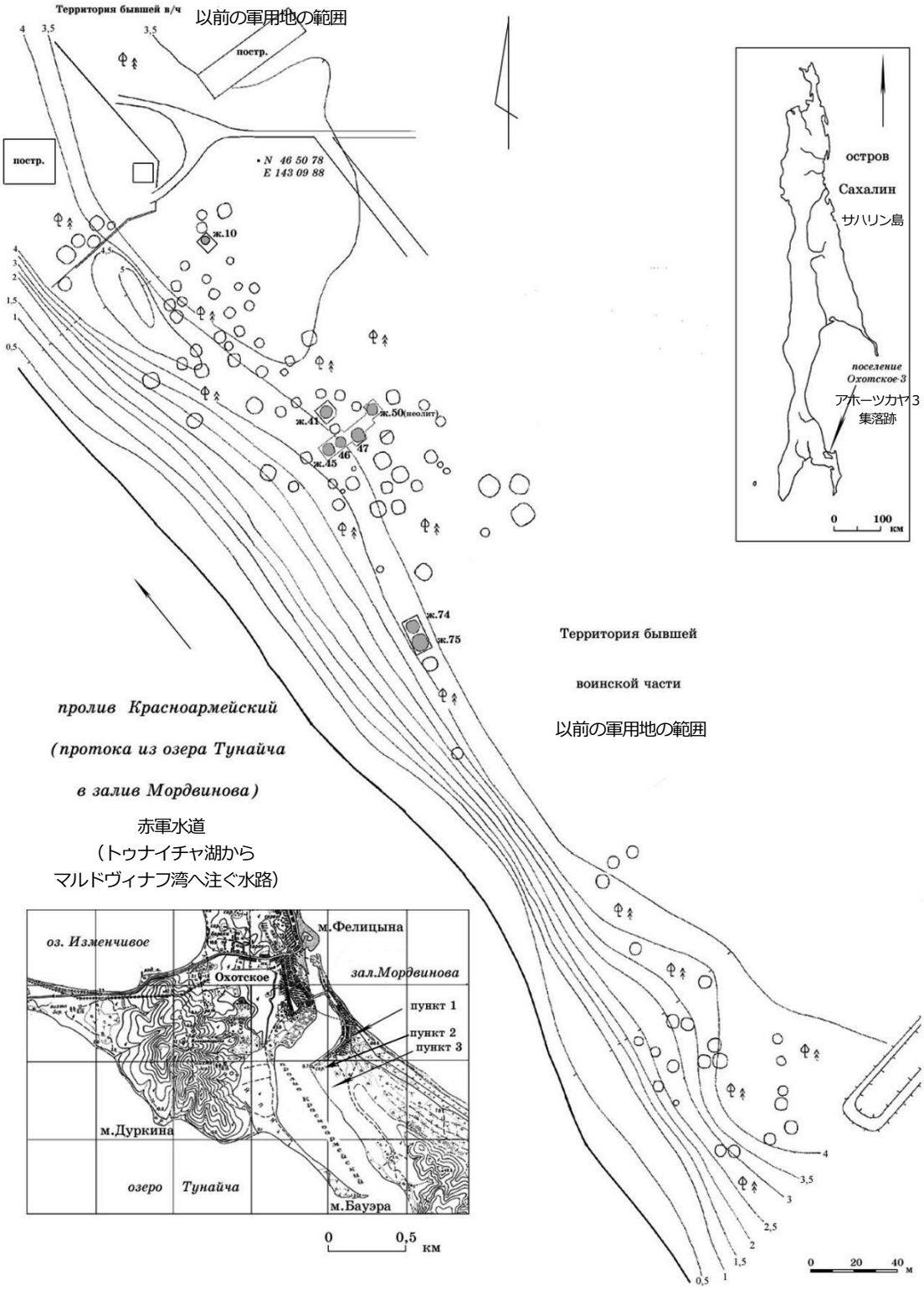

図２　アホーツカヤ３古代集落跡第３地点の平面図

地理的位置

アホーツカヤ 3 古代集落跡の地理的位置はサハリン南部湖沼地帯のオホーツク文化遺跡として典型的なものである。遺跡はトゥナイチャ潟湖とオホーツク海を結ぶ水路（赤軍水道）の右岸の高さ 3~5m の複合段丘上に位置し、水道の岸に沿って約 1500m にわたって連なるが、さらにいくつかの地点に細分される。アホーツカヤ 3 集落

図３　床面清掃時点の 41 号住居の全景、北から見る

跡はサハリン南部では最大の集落跡の一つであり、トゥナイチャ湖とイズミェンチヴァヤ湖の地域に集中する広大な複合・多層遺跡の複合体に属するものである（図 1）。この考古遺跡のかなりの部分は現在までに人為（アホーツカヤ村の建設、かつての軍事施設や現代の保養所・コテージ群建設。図 2）の結果破壊されてしまっている。

集落跡の北部の、文化層が道路と菜園で破壊されている区域（1 地点、アホーツカヤ村の南端にあたる）では多数の遺物が散布しており、鈴谷文化と、オホーツク文化の発展した段階、つまり江ノ浦期の特徴を示している。約 150 箇所の住居跡が略方形の窪んだ竪穴の状態で保存されており、規模は径 3~10m、深さ 0.3 から 0.8m である。集落遺跡中央部及び南部（2・3 地点）に残る竪穴住居跡の大多数は段丘上の最も高まった区域である浜堤の部分に集まっている。調査した住居では「南貝塚式」の遺物が見られ、「鈴谷式」「江の浦式」は欠如しているが、新石器文化層は到る所に認められる。竪穴群の外見からはその文化的な帰属について十分確信をもって決定することはできない。段丘の地表には灌木の茂みや混合樹林があり、多くの竪穴の輪郭は倒木や木の株、根によって変形している。

調査の経緯

集落跡は 1978 年にサハリン州立郷土誌博物館職員の B.O.シュービンと筆者によって発見された。当時、古代の住居群の大部分は軍用地の中にあり、立入は禁じられていた[3)]。1990 年代の終わりにこの土地が軍用地から開放され、私的なコテージや様々な組織の保養地の建設が活発になった。2000 年と 2001 年に国営統一道路企業体「エクスプロント」と国営統一企業体「ダリマルニェフチギアフィジカ共同企業体」の建設予定地で筆者の指揮するサハリン州立郷土誌博物館の調査隊が約 500m^2 の緊急発掘を行った。8 基の竪穴住居跡が検出され、また文化層の破壊された区域では資料の表面採集が行われた。学術報告と考古学的な収集品は博物館の学術文書室と収蔵庫に収められている[4)]。

アホーツカヤ 3 集落跡で発掘された 8 基の住居のうち 1 基は新石器のものであり（50 号）、他の 7 基（10、41、45、46、47、74 及び 75 号）が鉄器時代、つまりオホーツク文化末期またはアイヌ時代のもので、その顕著な特

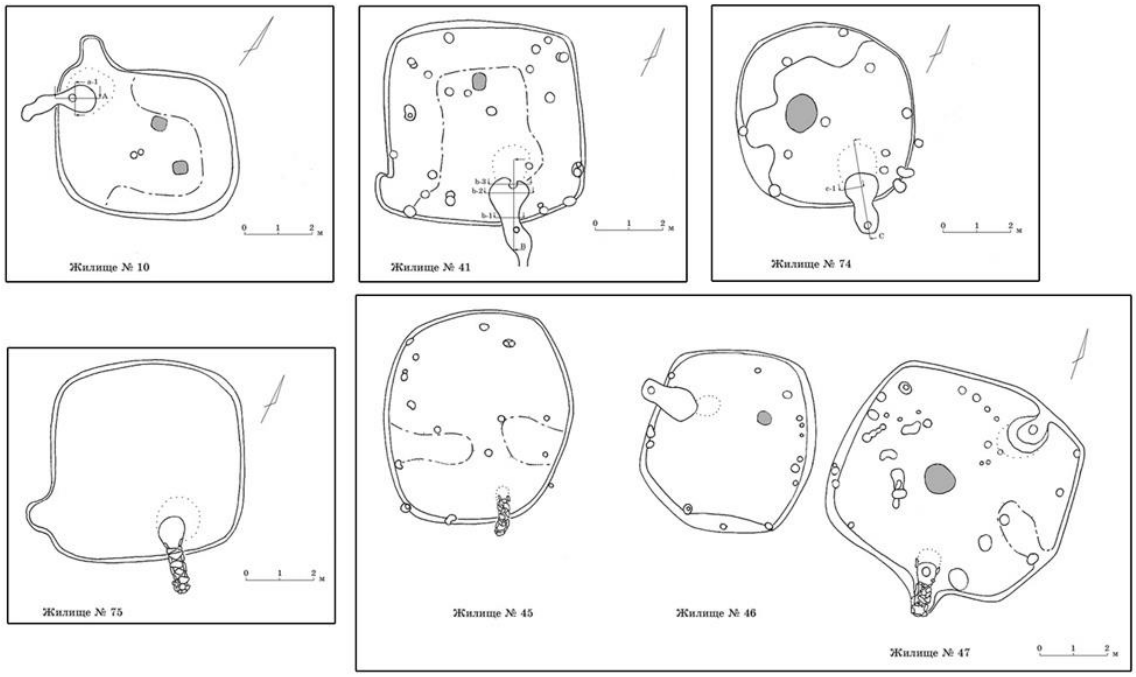

図４　アホーツカヤ３集落跡で 2000・2001 年に調査された住居の平面図

徴は粘土または石で作ったかまど様の施設の存在であった。層位と出土品の特徴からみて遺跡が多層性のものであることは確かで、発掘中に出土した遺物は異なる 3 つの年代と文化に属する。新石器文化（3 千 5 百から 3 千年前）、オホーツク文化末期（9~12 世紀）及びアイヌ文化（13~16 世紀）である。最も古い新石器文化の地層は後代の住居構築に際して一部破壊され、このため覆土と住居周囲の文化層は攪乱されており、オホーツク文化末期の資料だけでなく新石器文化のものも含んでいる。

遺跡の基盤をなす、固結部分を交えた砂層・砂質土層は軟弱で流動しやすく、また保水性が悪いため、竪穴の壁や住居の構造の痕跡は不明瞭にしか追跡できず、したがって住居跡の形状を正確に論じることはできない。遺跡には樹木が密生し、その結果枝分かれした根系が文化層を攪乱しているため、発掘の実施、地層における遺構と遺物の確認が大幅に妨げられた（図 3）。

集落跡の新石器文化複合の記述はまた別の研究主題であり、この論文ではそこには立ち入らない。ただ新石器の文化層は事実上発掘作業が及んだ区域の全てに伏在していることに注意しておきたい。見たところ新石器らしい遺物は出土品の圧倒的多数を占めており、層位的には厚さ 0.1 から 0.15m の明るい灰色の、草の根の層の直下に形成された（住居の周囲ではその竪穴の掘り上げ土に覆われているが）ポドゾル質の砂質土層と、その下層の鮮やかな黄色の、固結部分を交えた緻密な砂層に属し、後者では今日の地表から最大 0.6m の深さまで散発的に遺物の出土がある。2001 年には新石器の住居を 1 基発掘しており（50 号）、石器土器ともに多数の出土品が記録された。後代の住居跡の覆土や床面で採集された見たところ新石器らしい出土品の全ては、原位置を離れていることになる。

かまどのある住居の特性

調査された住居はいずれも概ね隅丸方形の各辺が張り出した輪郭、もしくは不正な多角形（五角形）の形状を有する（図 3・4）。規模は径 4~5 ないし 6~6.8m、面積にして 20 から 30m^2 である。どの住居も掘り下げは浅く、地山への基礎の掘り込みは 15－20cm、壁は竪穴から掘り出した土が 0.3 から 0.5m の高さで積み上げられている。3 基の住居では（10、41 及び 75 号）小規模な廊下状の出口（長さ約 1m、幅 0.8 から 1m）が水道の側へ向いているのがよく捉えられる。46・74 号住居では樹木の根系が壁を破壊していて出口の検出はうまくいかなかったが、

図５　2000 年のアホーツカヤ３集落跡 41 号住居の発掘状況
手前に粘土で築いたかまどの跡が見える。南東から。

この 2 つの住居では出口は地表にあったものと推定され、長さ 1.5m、幅 0.5~0.7m ほどの土を積んだ斜路があったとみられる。というのも 45 号住居ではこうした盛土が二か所、東西両方向に検出されたからである。大多数の住居の掘り込み（10 号と 75 号を除く）の床面では柱穴群が検出されており、41 号と 74 号住居では内側の構造が殊によく保存されていた。これらの住居では直立または傾斜した柱穴の検出が成功し、そういう木製の骨組の上に屋根の構造が載っていたと思われる。床面は腐植と灰混じりの薄い層が方形に広がっているのが、10 号と 41 号の 2 基だけではあるがよく検出できる。これら 2 つの住居では壁に沿ってほぼ全周に小さな段があるのが注意された。この段は 10~15cm の高さで砂を盛り上げたもので、住居の床よりはやや明色で軟らかいが、覆土よりは締まっていて一様な構成である。これは恐らくベッドあるいは寝椅子のようなもので 10 号住居では幅 0.8~1m、41 号住居では 1.4~1.6m の幅がある。

暖房その他の家事の必要に応じるため、調査した住居の全てで粘土または石で築いたかまどが用いられており、また多くのケースでは覆いの付かない、周囲を囲った痕跡もない炉ないし焚火跡が床の中央部にあってかまどを補っていた。焚火跡がない住居跡は 2 基だけ（45 号及び 75 号）であった。10 号住居では独特の 2 つの炉が記録された。これらはわざわざ正方形に深さ 6~8cm 掘り下げた周囲に粘土で厚さ 7~10cm の炉縁をつけた中にあり、その内法は 0.5×0.55m、内部は燃焼の産物―つまり強く腐植土化した、脂ぎった手触りの暗褐色の砂質土に炭片や灰が混じったものが厚さ 6cm ほど充満しており、その下には 6~8cm 以下の厚さで焼けた赤味のある砂層が見られた。41 号住居では床面に正方形に近くおおよそ 0.45×0.4m の規模の変色箇所が認められ、黒い脂っこい土が堆積していたが、有機物の分解したものや多くの炭化物が含まれているようだった。恐らくはこれも粘土の囲いはないが炉であったか、もしくはここに肉か魚を入れた木製または樹皮製の籠が置かれていたのであろう。

粘土で築いたかまどの記載

4 基の住居（10、41、46、74 号）でかまどの痕跡が発見され、いずれも同様な構造で位置も類似していた（図 5~9）。どれもみな住居の掘込みの南または西側の壁面に取り付けられている。かまどの構造は基部―住居の掘り

図６　アホーツカヤ３集落跡 41 号住居の粘土で築いたかまど
北西から見る。

図７　アホーツカヤ３集落跡 46 号住居の粘土で築いたかまど
北西から見る。

図８　アホーツカヤ３集落跡 74 号住居の粘土で築いたかまど
精査の着手前、北西から見る。

図９　アホーツカヤ３集落跡 74 号住居の粘土で築いたかまど
長軸断ち割り、北から見る。

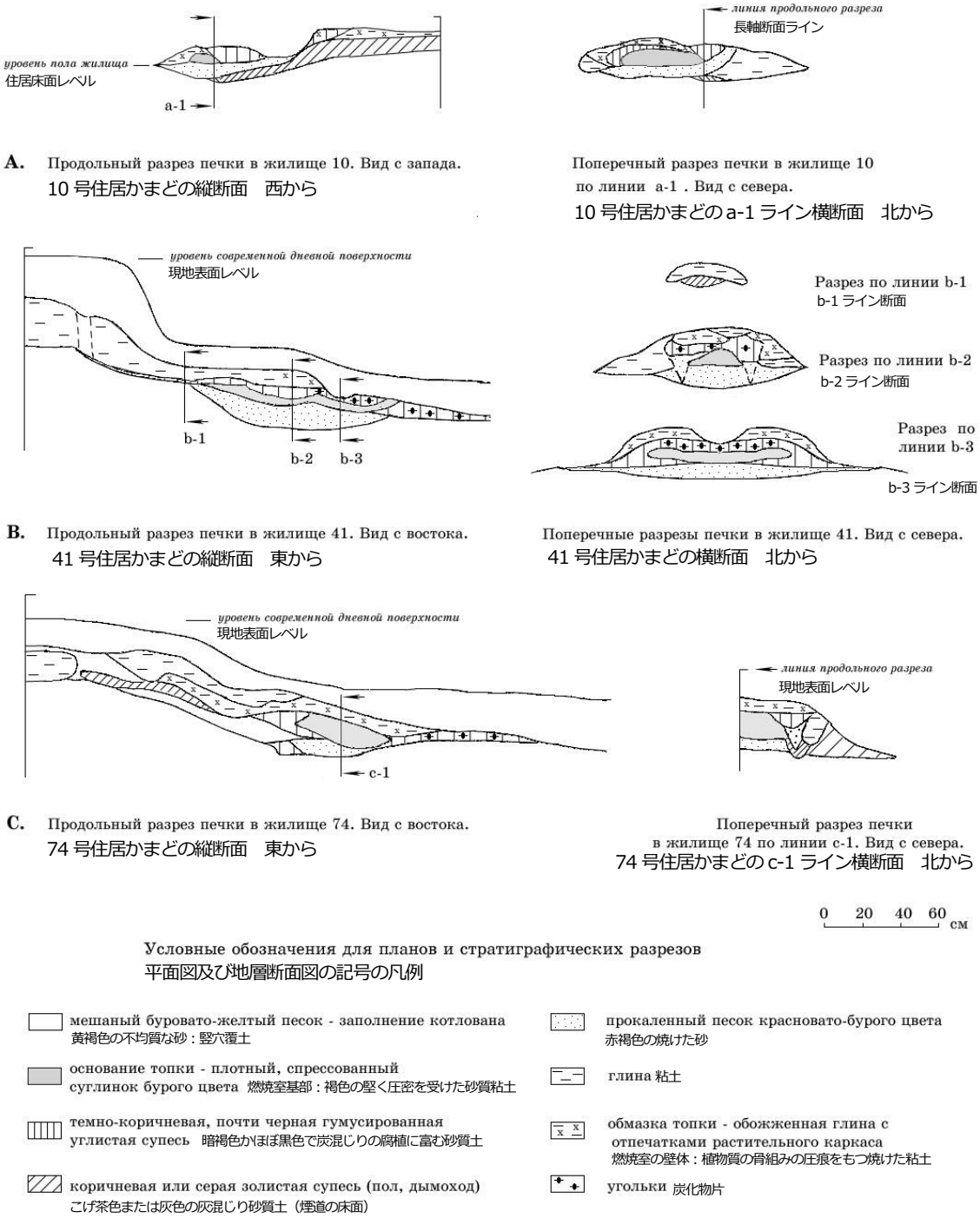

図 10　粘土で築いたかまどの地層断面　10 号（A)、41 号（B)、74 号（C)。

込みの内部にあり住居の壁面にぴったりと接続した燃焼室と天井部、及び竪穴の肩を切り通して竪穴外側の古代の地表面へと続く煙道から成っていた。

粘土で築いたかまどの構築についてはその地層断面によってよく確認できる（図 10)。燃焼室の規模は幅およそ 0.5m、長さは約 0.7m である。基底には厚さ 8~10cm で暗褐色をした、石のように堅く焼けた緻密な粘土のレンズがあり、その下位では地山の砂層がかなりの深さ（12~14cm に達する）まで熱を受け鮮やかな赤色を呈している。燃焼室の基底の上には火床の堆積物―厚さ 6~10cm で暗褐色かほとんど黒色の砂質粘土の層が挟まれ、多くの炭化物と、白っぽい鱗片状の、焼けた骨ないしは貝殻とおぼしい微細な有機物を含んでいる。かまどの天井

部は恐らく球状の形をし、植物質の骨組みに粘土を塗ったもので、その基部は燃焼室の両側で地面に固定されていたらしい。炎の影響で天井の下方（かまどの中心側）の部分は焼けて陶器のように硬化していた。

燃焼室の末端からおよそ 0.4m の距離に調理用の容器をかまどに掛ける場所があった。10 号・41 号住居のかまどでは粘土でできた天井部の上面に、直径約 0.25~0.3m、深さ 0.1m に達する円形の杯状の窪みがはっきりと認められる。10 号住居では窪みの縁に焼成された粘土片があってその縁は平滑な円形に整えられ、破面には植物繊維の圧痕がみられた。これはどうやら、かまどの構造の一部であるらしい。燃焼室の上の粘土でできた天井部には「コンロ」式の孔か、特殊な窪みがあって調理用の容器を据えたものと想定される。47 号住居床面ではかまどの手前の暗色の炭混じりの変色部に、小さな（3.5×3cm）不整形の焼けた粘土塊があってその片面を幅 2cm ほど浅い凹帯状になでつけた上と、加工のない膨らんだ部分に装飾とみられる十字型の刻線があったが、これはかまどを塗った粘土のかけらの可能性がある。もしそうであるならこれは、土製のかまど天井部にあった装飾が初めて発見されたものであるということになる。

煙道は幅約 0.25~0.3m、長さ 0.6~0.8m から 1.5m で、やはり植物質の骨組に厚い粘土の層を塗って作り、少しづつ上昇しながら住居の掘り込みの範囲を超えて外へ伸び、末端は径約 0.2m の管となって煙を排出する役目を果たしていた。複数の事例では煙道の出口付近の地表に生の粘土のレンズが確認されたが、これは排煙管を固定する機能を持っていたか、あるいはかまどの応急修理のために必要な素材を保管していたものの可能性がある。

かまどの周囲と住居の床面には、かまどを塗った粘土の焼けたものが小さな破片になって残っており、これらに骨組の痕跡である植物の圧痕がみられた。塗り土の断片に残った圧痕の組織の調査と、その組織のサハリン南部に生育する植物の標本との比較の結果、かまどの骨組の製作には地元の植物―原野や沼地に生えるイネ科植物であるヨシ（*Phragmites australis*）、スゲ（*Carex* sp.）及びノガリヤス（*Calamagrostis* sp.）の茎を使っていたことがわかった[5)]。北海道開拓記念館の専門家の意見によると、圧痕の一部はトクサ（*Equisetum hyemale* Linn.）のものである[6)]。塗り土のかけらには草の茎の痕が 2、3 本まとまってついているものがあり、時には茎を束ねたものの圧痕もあった。恐らくイネ科の茎を折り曲げたところへ粘土を塗りつけて（その際茎が折れることも多く、折れた箇所の圧痕も認められる）いたのだろう。煙道から住居の範囲外へ伸びた排煙管は木の幹をそのまま使っていたかもしれない。41 号と 74 号住居のかまどの地層断面では、垂直ないしやや傾斜した排煙のためのしかけが厚い粘土層で固定されていた跡が明白に確認される（図 10 の B・C）。

（以上、原著 188 ページ末尾まで。以下第 2 部に続く。）